
涼宮ハルヒの道程

鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの道程

【Nコード】

N4931M

【作者名】

鴉

【あらすじ】

事故に遭って死んでしまった少年は、涼宮ハルヒとして生を受けました……みたいなテンプレート。拙い文章ですが、『それでも一向に構わないぜ!』という素晴らしい気概の方は読み下さい。では、ゆっくりしていいからね!

初（前書き）

変なところは報告して頂くか脳内補完して頂ければ幸いです。

初

やっと、と言っべきか。待ち望んだこの日、この瞬間が訪れた。思えば此処まで永かったものだ。慣れない生活には苦勞させられたし、“彼女”を演じるのにも多大な勞力を必要とした。

しかしそれもこれも、やっと終わる　いや、今のは完全に間違いだな、終わりじゃない。

これから俺が口にする、奇妙にして奇天烈な発言で、物語はようやく動くと言ってもいいだろう。

俺は横目で窓の外を見遣る。

まさに、アル晴レタ日ノ事、だな。

薄く笑い、視線を前へ戻す。ちょうど前の奴が平凡極まりない自己紹介を終えたところだった。

いや、これからする俺の自己紹介に比べりゃ、誰の自己紹介だって平凡に思えるだろう。

担任に促され、俺は席を立つ。此処からが重要だった。

「東中出身、涼宮ハルヒ。ただの人間には興味ありません。もしこの中に、宇宙人、未りゃい人、異しえ界人、超能力者が居たら、あたしの所に来なさい。以上！」

俺は腕組みをし、仁王立ちで。

盛大に、台詞を囃んだのだった。

一 涼宮ハルヒは転生者（前書き）

脳内補完、頼みました。

一 涼宮ハルヒは転生者

何故だろうと考えた事は一度も無い。のは嘘であるが、考えても仕方ないと思いを放棄したのは事実だ。

実際、考えても仕方なかった。

車に轢かれた次の瞬間には、俺は既に別人になっていたから。在り来り？ 知った事か。

まあ、この現象が、有りがちな転生モノである事は分からなくもないが、分かるのはそれだけだ。何故俺が“そいつ”になったのか、とか、何故俺なのか、とか……その辺りは分かる筈もなかった。な？ 考えても仕方ないだろ？

しかしだ、ある種幸いだったのは、俺が転生した姿が、俺の知る人物だったという事だ。

言っておくが、この人物は現実の知り合いではない。では、誰なのか。

……突然だが、皆さんはライトノベルをご存知だろうか。その名の通り軽い小説で、若者向けの軽文学なのだが、当然の事ながらこのライトノベルにも人気作がある。それはまあ多々あるのだが、中でも俺が好きな作品の一つに『涼宮ハルヒの憂鬱』というモノがある。

この作品に対する詳記は割愛させて頂くが、この物語にはタイトルにあるように涼宮ハルヒという人物が居て、そいつが様々な問題を引き起こすのだ。そして主人公と愉快な仲間達がその問題に立ち向かったり、はたまた学校でのんびんだらりと過ごしたりする、まあそんなお話（違うか？）。ビミョーに非日常系学園ストーリーとはよく言ったものだ。

さて、ここで先程の『俺は既に別人になっていた』というくだり

を思い出して頂きたい。

わざわざ別人になったという話の後に『涼宮ハルヒの憂鬱』の話をしたのだから、察しの良い人は既に分かっているかもしれないが、

俺は事故に遭い、気付いた時には 涼宮ハルヒになっていたのだ。

“あの” 涼宮ハルヒに、だ。驚天動地だろう？

例の超常的変態パワーも備わっている、筈だ。根拠として俺は涼宮ハルヒの中学時代をおおよそ原作通りに体感したからな。あそこで高校生の主人公ことキョンと出会ったという事は、その後の事も目に浮かぶというものだ。

そんな馬鹿な、と思うだろうか。いやいや、それは俺が声を大にして全国的に宣ってやりたい事なのだが、残念な事にこれは事実だ。何故だろうと考えたってホントのホントに仕方がない。

俺は涼宮ハルヒとして人生を一からやり直す羽目になり、そして今日 高校入学まで現に生きてきた。当然だが女としてだぞ。

男だった俺が、女として生きる……しかも別人の体でだ。何て滑稽なのだろう。

大体にして涼宮ハルヒの体だ、かなり魅惑的でだな、俺の男の本能的な部分がこれまで何度駆り立てられたか。

……閑話休題。

ともかくとして、俺はようやく物語のプロローグに立てた事になる。自己紹介も既に終わったしな、噛んだけど。

後は主人公のキョン 前の席に座る枯れた高校生 が俺に絡んでくるのを待っただけだったが、それには素っ頓狂な自己紹介から数日待たなければならなかった。ここまで原作に忠実なのか、面倒

なこった。

一体数日とはどれほどの日数なのか、そのあたりが分からない。まだかまだかと地味にそわそわしつつ健気に待つ事、ようやくその日がやってきた。

しかしながらその時の俺はそんな事を知る由も無く、気を張るのも疲れるので机にぐでーっと突っ伏すと、同時にキョンが振り向いた。間が悪い。

「な、なあ」

何故か苦笑気味にキョンが話し掛けてくる。何故苦笑いなんだ、ああ、あんな事を言った奴が机に突っ伏してるからか？ 割りとへにやっと。

「しょっぱなの自己紹介のアレ、どのへんまで本気だったんだ？」

さて、確か原作にもあったこの問い掛け。原作ならハルヒはかなリツンツンな感じでキョンを突っぱねていた筈。どうしよう、俺も原作に沿った行動をするべきか？

でもなあ、原作通りに行動なんて無理があるよな、台詞を一言一句覚えてる訳でもないし。

どうするか。

「驚いた？」

「まあな」

「あたしも驚いたわよ、まさかあそこで噛んじゃうなんてね！ あははははは！」

「……………」

そこなのか。

キョンの、そんな呟きが聞こえた気がした。

どうも俺は原作ハルヒのようにつんけん出来そうにない。ああいう振る舞いは精神衛生上あまり宜しくない。断言しよう、宜しくない。

実は中学の頃、例の奇行から、俺は原作ハルヒのような振る舞いをしてきて、だからこそ断言出来るのだが、あれはやだね、二度と

したくない。

しかしだ、俺は原作ハルヒさながらに振る舞い、そのまま中学を卒業まで過ごしてしまっているからして 教室内をちらつと窺えば、東中出身の連中がこちらの様子を見て啞然としている。奴らの目には今の俺は^{ハルヒ}どう映っているのか、高校入学を期にイメージを一新しようと思論む女、そんな風に映っているのかね。

まあ、構いやしないさ。

原作に沿ってSOS団さえ設立出来れば、少なくとも四人は仲間が出来る事だし。

取り敢えずは目の前に居る“雑用”を引き込むとしよう。

「あー、涼宮さん」

「ん、ハルヒでいいわよ」

「は？ あ、ああ、そうか……なら、ハルヒ」

「何？」

「もう一度尋ねるが、自己紹介のアレは、本気か？」

と、その時、がらりと教室の扉が開き、担任の岡部がやって来た。ああホント、間が悪い。

仕方なしに前に向き直るキョンに、俺は小声で先程の問いに答えた。

「当然、ね」

キョンは聞こえたのか、一瞬こちらを見遣った後、また前を向いた。

さてと、大分原作から逸れた発言をしたなあ、俺。

背もたれにもたれながらそんな事を思う俺は、東中出身の連中から奇異の視線を無遠慮に浴びせられていた。

いかにも心外だな、俺は友達を作ろうと頑張っていただけなのに。

二 涼宮ハルヒはクラスメートと喋る様です（前書き）

何も考えずに書いているので、途中自分でも何を書いているのか分からなくなったりしました。

というか分からないまま投稿しました。しかも短いっていうね。

いや、でも、まあ、ね。

一応頑張りましたけど、脳内補完力をフル稼働させて読んで下さい。

それだけが私の望m（ry

二 涼宮ハルヒはクラスメートと喋る様です

俺とキヨンの邂逅から既に一週間以上過ぎた。俺がしでかした中学時代の奇行の話が俺の耳にまでちらほら届くようになってきたが、俺はまだ完全にクラスから浮いた存在にはなっていないかった、とは言えそれは時間の問題で、今の俺はさながらサスペンスの帝王が迎える崖っぷちクライマックスな状況に身を置いているのと大差無い。いや、まだまだクライマックスではないが。

しかしキヨンとは毎日一言二言喋るといった関係を維持していた。ファイトだ俺。

原作程ファースト・コンタクトが悪くなかった、というのは大きいだろう、キヨンの方から話し掛けてくる事も多くなってきた。

話し掛けてくるのは何もキヨンだけではなく、恐らくはクラスから孤立しかけている俺に同情を禁じえなかった連中が頻繁に声を掛けてくるのだが、正直対応が面倒臭い。けど苦笑一貫というのもどうかと思ひ、取り敢えず返事はするようにしている。

以下、俺とクラスメートの心温まる交流の一部である。

「ねえ、昨日のドラマ見た？ 九時からのやつ」

「見たわ！ 親友と殴り合うシーンは圧巻の一言だったわね！」

「え……何それ？」

「えっ」

「えっ」

「あれ？ 違う？」

「昨日はキスシーンだったよね？」

「えっ」

「えっ」

交流終了。如何だったろうか、俺の慎ましいながらも頑張った名付けて新・涼宮外交は。原作と丸つきり違う対応がこの先の物語に影響を及ぼすのかは分からないが、まあそれが人生だよな、うん。

全然会話が噛み合わなかったが。

あわよくば、これを期にクラスの中での疎外感溢れる原作立ち位置が変わればなあとか考えてはいるが、今のところ俺の一番の目標はキョンただ一人である。

という訳で最近の俺は昼飯をキョンと共にしていたりする。その所為で何やら良からぬ噂が暗雲の如く立ち込めていやがったりするのだが、そのあたりはスルースキル全開で無視を決め込もうと思う。「おいキョン、ちよつと来いよ」

で、今は昼休みで、キョンを誘おうとしていると谷口と国木田に掠め取られた。

仕方ないので一人寂しく、と言うのは別に寂しくないのだから違いかもしれないが、まあとにかく一人でもそもそと弁当を食う事にした。因みに弁当は俺自身が作っていたりする。

さておき。

そうして一人で弁当を食べていた俺だったが、何と、先程の交流回想に出てきた女子と一緒に食べようと申し出てくれたのだ。感無量である。これが元々の俺に対するお誘いだっただなら驚喜して乱舞モノだが、残念な事に今の俺は涼宮ハルヒなんだよな、ちくしょう！ どうして俺はハルヒなんだ！ ……失礼、取り乱した。

例の女子は椅子を持ってきて、一つの机で向き合って座る。もうこんな事してる時点で原作とは乖離している気が……まあいいか。今は俺の人生なんだから。

「涼宮さんはさー」

「ハルヒでいいわ」

「え？ あ、じゃあ……ハルヒ、さん、は」

「ハルヒでいいわ」

「あ、うん……は、ハルヒは……」

「何？」

「あの人……キョン……だよな？ キョンくんにはべったりじゃない」
「そうね」

否定はしない。

「最近二人の話で持ち切りでね、二人の様子を見て、ハルヒと同じ
中学だった子達がこう言ってるの」

「何て？」

「『嵐の前の静けさ、キョンくん可哀相』って」

「……へえ」

ああ、やっぱりなんか企んでるって思われてる訳ね。合ってるけど。

……意図的とは言え、少しキョンに迫り過ぎているだろうか。妙な噂が立つてもおかしくなくらいには付き纏っている訳だから、過剰なのは自分でも分かるが。

序盤も序盤で、随分原作からズレているな、ホント。何度も言うてるけど。

弁当を完食し、女子も何処かへ行ってしまった。キョンは……まだ谷口達と話し込んでいる。

谷口がチラチラとこちらを見ながら口を動かしてあるあたり、キョンに忠告しているのだろっ、『涼宮ハルヒは止めとけ』ってな感じの事を。

そう言えば、谷口に告られた事もあったな、原作同様。五秒でさよならしたが。

こちらを窺う谷口の双眸がやけに鋭いのは、その事が関係しているのかもしれない。

おっと、目が合った。思い切って微笑んでみる。ニコッ。……困惑してら、谷口の奴。ああ愉快だ。

あちらの様子を見る限り、どうやら先程俺がした『ニコッ』の所

為で谷口がヒートアップしたようで、こりやまだまだ終わりそうにない。そして、昼休み終了まではまだ結構な時間が残されている。こうしていてもしょうがない、そう判断した俺は教室を後にし、歩き始めた。行く宛ては……実はある。今の内に接触しておいてもいいと思うんだ。

廊下を歩き、辿り着いた先。

そこは、涼宮ハルヒ待望の宇宙人が居る　　文芸部室であつた。

二 涼宮ハルヒはクラスメートと喋る様です（後書き）

長門さんが登場しますよ。

長く書けたらいいなっ。

長門さんのキャラが崩壊しますよ。

ちゃんと書けたらいいなっ。

そんな次話を待つてくれる素晴らしい人は居ますか。

三 宇宙人は読書が好き（前書き）

間を空けずに投稿したいです、でも多分無理そうです。

一日十二時間以上眠りますので、はい。夏休みって素晴らしいですよね！

では本編をどうぞ。

三 宇宙人は読書が好き

「もしあいつに気があるんなら、悪いことは言わん、止めとけ。涼宮が変人だつてのは充分解つたる」

出し抜けに谷口がそう言った。馬鹿言え、気なんかあるものか。向こうから絡んでくるんだぞ。

「断れよ」

「何をだ」

「一緒に飯食つたりする事をだ」

輪切りのゆで卵を口に放り込み、もぐもぐしながら、

「あいつの奇人ぶりは常軌を逸している。高校生にもなつたら少しは落ち着くかと思つたんだが全然変わつてないな。聞いたろ、あの自己紹介」

「宇宙人がどうとかつてやつ？」

国木田がさりげなく谷口の弁当を盗み食いつつ訊く。おいこら、俺の方にまで食指を伸ばすな。

「そ。中学時代にも訳の解らん事を言いながら訳の解らんことを散々やり倒していたな。有名なのが校庭落書き事件」

ニヤニヤと締まらない顔付きで過去の事を語る谷口。どうでもいいがもうお前の弁当は残り僅かだぞ、おつ、谷口よ、この卵焼き美味いな。

「石灰で白線引く道具があるだろ。あれ何つつんだっけ？ まあいいや、とにかくそれで校庭にデカデカとけつたいな絵文字を書きやがった事がある。しかも夜中の学校に忍び込んで」

お前の弁当にも国木田の箸が忍び込んでるぞ、明らかな領空侵犯だな、少しは自分の弁当に関心を持つたらどうだ。

「驚くよな。朝学校来たらグラウンドに巨大な丸とか三角とかが一面に書きなぐつてあるんだぜ。近くで見ても何が書いてあるのか解らんから試しに校舎の四階から見してみたんだが、やっぱり何が書い

てあるのか解らんかったな」

「あ、それ見た覚えあるな。確か新聞の地方欄に載ってなかった？
航空写真でさ。出来そこないのナスカの地上絵みたいなの」

食べ終わったのか、国木田は弁当箱を片付けながら言う。俺には
そんなものの覚えが無い。

「載ってた載ってた。中学校の校庭に描かれた謎のイタズラ書き、
ってな。で、こんなアホな事をした犯人は誰だって事になったんだ
が……」

「その犯人があいつだったって訳か」

ちらりと、俺は教室の片隅でクラスメートと箸を突き合ってる涼
宮ハルヒの方を見遣る。確かに言動は所々おかしいが、こうして見
るとあいつが中学の頃にそんな事を本当にしでかしたのか、少しば
かり疑問だった。いやしかし、谷口の話している事は既に起きた事
なのだから疑問など挟む余地が無いのだが。

「本人がそう言ったんだから間違いない。当然、何でそんな事した
んだってなるわな。校長室にまで呼ばれてたぜ。教師総掛かりで問
いつめられたらしい」

「何でそんな事したんだ？」

「知らん」

あっさり答えると弁当へ視線を向けた谷口だったが……遅かった
な、既にお前の弁当は（主に）国木田の腹の中だ。

「ちつきしょー！ テメーかキョン！？」

違う、とは言い切れない身に覚えあり過ぎる俺は、それとなしに
お茶を濁した。国木田は俺達を見てケラケラと笑っていやがる、忌
々しい。

「覚えてろよキョンテメー」

俺だけか。

「……で、だ。とうとう白状しなかったそうだ。だんまりを決め込
んだ涼宮のキツい目で睨まれてみる、もうどうしようもないぜ。
一説によるとUFOを呼ぶための地上絵だとか、あるいは悪魔召喚

の魔法陣だとか、または異世界への扉を開こうとしてたとか、噂は色々あったんだが、とにかく本人が理由を言わんのだから仕方がない。今もって謎のままだ」

あいつはそんなにキツイ目付きをしていただろうが、思い返すと、俺の記憶にある涼宮ハルヒは基本が笑顔だった。その笑みが心からのモノなのか、それとも単なる作り笑顔なのかは、俺の拙い観察眼では解るべくもなかったが。

ところで、こうして語る谷口だが、声量はかなり設定低めだ。どうも涼宮ハルヒを気にしながら話しているようなのだが、そこまで気にするならそもそも暴露するなど鼓膜に直接伝えてやりたい。

ハルヒの奴は今し方教室を出て行き、谷口が大きく安堵の息を吐くのを、俺は先程の話を反芻しながらただぼーっと見ていた。

「他にもいっぱいやってたぞ」

谷口の涼宮ハルヒ奇行語りは昼休み一杯まで続いた。

実際に見ると文芸部室は意外に広い。長テーブルとパイプ椅子、それにスチール製の本棚くらいしかないアニメ版ハルヒではお馴染みの光景が、そこには広がっていた。ちよつと感動。

そして部屋の端には、オマケのようにちょこんと椅子に座って本を読む、小柄な少女の姿が。

「長門有希ね？」

訊くと彼女は、

「……………」

三点リーダーを並べるのみだった。だんまりである。

仕方ないので関連キーワードを並べてみる事にした。

「宇宙人」

「……………」

微かに動いた気がする。原作のキヨンは凄いもんだと心底感服するね、こんな人形みたいな奴の変化を見破ってた訳だから。俺もいつかは…………、と意気込みつつ、更にキーワードを口にする。

「インターフェース」

「……………」

さつきと違いが解らん。

「情報統合思ね」

んたい、と続けようとしたところを、本を閉じる音が遮った。先程までこちらに見向きもしなかった長門が、こちらを真っ直ぐに見据えている。

「貴女は、何者」

気のせいだろうか、この言葉に敵意が滲んでいる気がする。気のせいだと思いたい、というか思おう。敵に回して勝てる相手じゃないぞ、このインターフェース殿は。

「私は涼宮ハルヒよ、宜しくね」

「……………」

確か長門は三年前から俺　もとい、涼宮ハルヒ　を観察していた筈。そして俺は今まで、なるべく原作ハルヒを演じていた訳で、流石の長門も俺が自分達に関する知識を保有していると思っててもみなかったようだった。

統合思念体的に、俺は自立進化の可能性…………だったよな？　原作

知識を有する俺は、言わばキヨン以上のイレギュラー因子だが、そのあたりはどうか。妨げになるとか言われたりしないだろうか。沈黙していた長門はこちらから目を背けると、またも本を開き、メトロノームさながらに一定の速度でページをめくり始めた。ただでさえ読めない表情が、初期標準装備の眼鏡が光を反射して、ますます読めなくなった。

沈黙が耳に痛い。

長門は俺をどう思っているのか、ファースト・インプレッションはどうにも悪いような気がしてならなかった。

三 宇宙人は読書が好き（後書き）

世界を改変させる事に定評のある長門つちの登場です、が、殆ど本を読んでるだけです。何考えてるのか私にもさっぱり解りません。

取り敢えず彼女にはゆくゆくメイドにでもなってもらいましょうかね！

こんな後書きまで読んでくれた皆様に感謝。

四 沈黙の長門

未だ四月。クラス内ではそれなりにグループが出来て来たように思う、が、俺は相変わらずクラスでの繋がりは基本的にキヨンだけであつた。

さておき。

現状だが、キヨンとの関係は割りと良好だと思う。最近キヨンが時折笑みを零したりもするし、もしかすると原作より良い関係を築けている、かもしれない。

一方で、長門とは微妙なところだ。

俺が話し掛けても反応しない。一切だ。人間なら少なからず反応するもの、だと思うのだが、長門はピクリともしない。ホント洒落にならん、かなり心をざっくり刺してくれる。

やはり俺が余計な事を言ったのが原因だろうが、まさかこんな対応を取ってくるとは露とも思わなかったので、内心驚愕気味だ。

これから長門と上手くやれるだろうか、正直無理じゃないかな、なんて考えてる自分が居る。いや、あの長門怖いよマジで。

と、まあ進展無しでこれからは危ぶまれるが、俺としてはキヨンとへらへら笑い合つてりゃしばらくはいい。あくまで、しばらくは、だが。

確か原作ハルヒも日数的には入学からかなり経った頃に暴走してたから、原作に基づいた奇行を行うまでまだ時間はある。ま、それまではせいぜいのんびりさせて貰うとしよう。

奇行と言えば、原作ハルヒがこの時期に見せた暴走の片鱗の中に毎日髪型を変える、といったものがあつたが、さてどうしようか。毎日髪型を変えるつもりは毛頭無い。しかしだ、原作のように髪をばつさり切るか、はたまた、折角伸ばしに伸ばした髪なのだからそのままにしておくか、その辺が悩みどころなのだ。

「うーむ……どうするか……」

教室の自席にて、自身の髪型について真剣に悩む俺は、果たして周囲の目にはどう映っているのか。大体察しがつくのが悲しいところである。

「何をどうするんだ？」

「うひゃッ!？」

前方から掛かった声はキヨンのものであるが、突然の事に俺は危うく椅子ごと後ろにひっくり返りそうになった。わたわたと腕を振り回して何とか元の位置に戻る。

「……キヨン、突然声を掛けるのは止めて頂戴」

「あ、ああ……正直、済まなかった」

危機を脱した事で、俺が盛大に息を吐いていると、キヨンが再度俺に訊いてきた。

「で、どうしたんだ？ 随分お悩みのようだが」

その時ふと、キヨンの顔を見て思い付いた 或いは思い出した髪型があった。そう、アレだ。

「ポニーテールにしようかな……」

ポニーテール。キヨンが好きだという髪型だが、原作では残念な事にハルヒの髪が短かった為、ちょんまげにしかならなかった。が、しかし、今の俺ならば見事なポニーテールが出来るし、何より……俺自身、ポニテは結構好みだったりする。ツインテールよりポニーテール派だ。

そんな俺の呟きに、耳聡く反応したキヨンは、

「……ハルヒ」

「な、なによ」

「ポニーテール、良いと思うぞ」

未だかつて見た事の無い清々しい笑顔で、俺にポニーテールを推奨した。こういうのはキャラ崩壊と呼ぶのだろうか。……考えないようにしよう。

キヨンの笑顔に苦笑しながら、俺達はポニーテールについて休み時間の全てを費やして語らった。

放課後の文芸部室には、やはり長門 有希が一人、椅子に座り本を読み耽っていた。その様子は人間というよりも何処か機械的な感じがして、俺は彼女が人間ではない事を再認識した。……こんな事で認識したくはないものだが。

無表情の彼女は俺を一瞥すらせずに本を読んでいる。警戒してるなら寧ろ俺を見ると思っただが、その辺をインターフェース殿はどう考えているのか。「目で見なくとも貴様の姿は捉えてるぜッ！」みたいな感じなのかもしれないが、俺の感覚的にはそんな感じでもなさそうで。

結局、長門が俺をどう思っているかなんて分からなかった。まあ、分かる筈もないのだが、こんな態度を取られると気になるのが人間というものだ、そうだろう？ 異論は認めない。

話し掛けても反応を返さないのなら、触ってみるのはどうだろう。頬をムニムニしてみるとか。案外容易く反応してくれるかも。

そんな事を考えてた時期が、俺にもあったさ。

長門に近付き、そおっと、頬まで手を伸ばしつつついてみた。
無反応。

両手で顔を挟んで高速で上下に動かしてみた。
無反応。

力いっぱい摘んでみた。
無反応。

思い切ってひっぱたいてみた。
無反応。

.....。

俺には、どうする事も出来そうにありません。これを見たあなた、
どうかこの長門を何かしら反応させて下さい。それだけが俺の望み
です。

五 朝倉涼子とあちゃくらさん（前書き）

「おいおい何だこりゃ、短すぎんぜテーマ」と友人に散々言われた今回のお話。満を持して朝倉さんが登場致しまする。

今更ですが、この作品はキャラ崩壊が凄まじいモノとなっております。狂ってやがる……そんなレベルです。終わったな、と思う事もあるでしょう。……しかし、言わせて下さい。終わったのではなく寧ろ、始まったのだと！

（中略）

最後に言わせて貰う……ハルヒのポニテって……最高だと……思うんだ……。

追記：テンションに身を任せてしまいました。後悔も反省もしていません。

五 朝倉涼子とあちゃくらさん

黄金週間を明日に控えた本日、クラス内は何となく浮ついた雰囲気包まれている。朝のホームルーム前の教室を飛び交う話題は大体が『休みにどう過ごすか』であった。

そのクラスの流れに便乗する形で、俺はキヨンに話を振る。

「キヨンはゴールデンウィークに予定あるの？」

「妹のお守り」

「枯れてるわねえ」

「……ハルヒよ、そういうお前こそどうなんだ？」

気の所為だろうか、キヨンが些かムツとしたような表情になった。キヨンってこんなキヤラだったっけ。うーむ、よく分からん。

何処か気怠げな目が見据える。俺はその目をハルヒのぱっちりおめめで見詰めて言った。

「未定よ、み・て・い」

「要するに予定は無い、と」

「これから予定を入れるのよ」

予定が入る予定が、そもそも俺には無い。恐らくは自宅で怠惰に過ごすだろうさ。原作ハルヒだったら考えられない事かもしれないが。

キヨンは溜息を吐き、やれやれと言わんばかりに肩を竦めた。妹ちゃんのお守り如きで予定無し of 俺よりも上に立ってるつもりなのか、こいつは。だったら妹ちゃんを俺に預けてみるッ、お前の代わりにお守りくらいしてやるわッ。

とは言えず。

何だか、そこはかとなない敗北感が込み上げてきた俺は、咄嗟に話題の転換を行おうと頭の中で話題を探る。直ぐさま、頭に浮かんだ。話題はズバリ、俺の髪型である。

実は、俺は以前のポニテ事件（いや、事件って訳じゃないが、何

となく)から五月に入っても、ポニーテールにはしていなかった。理由は単純明瞭、俺が朝起きる度にポニテの事なんかすっかりさっぱり忘却の彼方だった為である。いやー、事件翌日のキヨンの落胆ぶりは見ていて辛かったね。

だが、今日は違う。今日の俺は違ったのだ。起床直後に「ポニーテール」と近所迷惑な程の音量で叫んだ程である。取り敢えず近所に住むハカセくんに心中で平謝りした。何となく。

とにかく、俺は髪をポニーテールにしてあるのだ。それも我ながら惚れ惚れする出来栄え、抜かりはない。

しかし、だ。

俺はてつきり最高の賛辞がキヨンの口から飛び出るものだと思っていたから驚きである。この話題すら振ってこなかったのだ。まあ、だから俺自ら振ってやろうと思ったのだが。

「ところでキヨン」

「ん？」

「……あー」

いざ言おうとして、言葉が詰まる。いや、何て言えばいいのさ。自分の髪のを自分から語り出すってどうよ。

「どうしたんだ？」

キヨンが「何だこいつ」みたいな視線を無遠慮にぶつけてくる。痛い痛いっ、なんか視線が質量持つてる気がするっ！

俺はどうにか言外にポニテの事を話題にしようと髪をさりげなく弄ってみたいする。決してキヨンの視線から逃げようとしている訳ではないのだ。

その時、「あー」と、キヨンが声を発し、

「似合ってるぞ、そのポニテ」

臆面も無くそう言った。何て恥ずかしい奴なんだ、こいつは。照れるじゃないか。

「あたしも似合ってると思うわよ」

俺が柄にもなく照れていると、唐突に女の声が降ってきた。軽い

ソプラノの心地良い響き。反射的に視線を声のした方へ向ける。

そこには、朝倉涼子がにこやかな表情で立っていた。

「うん、ありがとう、あちゃくらさん」

「ふふ、涼宮さん？ あたしは朝倉よ？」

「知ってるわよ、あちゃくらさん」

「朝倉だつてば」

「だから知ってるって、あちゃくらさんでしょ？」

「……わざとなのかしら？ わざとなのかしら？」

「あちゃく……朝倉、落ち着け、同じ事を二回言ってるぞ」

「キヨン君までそんなッ」

「どうしたの、あちゃくらさん。疲れてるのかしら、勉強のし過ぎは良くないわよ」

俺が微笑んでやると、ふらふらとよろめいた朝倉は、「あちゃくらじゃないってばー！」と叫んで教室を出て行ってしまった。もうすぐホームルームだが、良いのか、優等生。

キャラ崩壊の瞬間を目の当たりにした俺は、あちゃくらさんの何が嫌だったのかについて、キヨンと一時語らった。

数分後、朝倉涼子は担任の岡部教諭に拿捕され教室に舞い戻ってきた。

あれが長門と同じインターフェイスで、キヨンを殺そうとする朝倉とは、とてもじゃないが思えなかった。

しょぼくれた様子で席に着く彼女の雰囲気はまさしく『あちゃくらさん』だと思ふのだが、この事は誰にも話さないでおこう。話しても詮無い事なのだが。

以後、俺の中で朝倉涼子の呼び名は『あちゃくらさん』とする。異論は認めない。

六 ゴールデンウィーク初日の事（前書き）

何も考えずに書いた結果がこれだよッ！

六 ゴールデンウィーク初日の事

お天道様の輝度が去年に比べ些か増してやしないかと思いつながら、俺は僅かに出た汗を拭った。しかし、この汗は暑いからじゃない。きつと冷や汗だ。

ちら、と隣を見遣れば、長門有希が相変わらずの無表情で音も無く歩いている。そこには無言の圧力みたいなものが感じられ、俺は少しばかり萎縮してしまっていたりする。

ゴールデンウィークの初日。

そんな日に何故、こんな思いをしなければならないのか。邂逅したあの時、選択肢を間違えた報いなのかもしれない。地味に嫌だ。

別に今日、俺と長門は「遊ぼうぜ！」と約束をしていた訳ではない。単に俺が駅前をぶらぶらしていると、長門にばったり出くわしただけの話。なのだが、長門相手だと偶然と思えない、不思議で、だ。出くわした後、長門が俺に着いてきて……現在に至る。

理由？ 知らん、寧ろ俺が知りたいくらいだ。こんな願いにハルヒの変態パワーは働かないから残念である。

突然だがここで問題だ！ この現状から抜け出す為にはどうすればいいか？

三択 ひとつだけ選びなさい。

答え？ 聡明なハルヒさんは突如打開策を閃く。

答え？ 友人が来て助けてくれる。

答え？ 無駄だ。現実是非常である。

俺としては？が いいが、いかんせん俺には友人と呼べる奴が少ない、ってか殆ど居ない。せいぜいキヨンくらいのものである。そのキヨンも今は妹ちゃんのお守りだろうから当てに出来ない。

？も無理だ、そうそう打開策なんて閃かない。俺の頭は原作とは違って低スペックなんだよ。

……となると残る答えは……？になる。

無駄なのか。現実是非常なのか。打ち拉がれちゃうぞこんにやろう。

そうして、俺は現状を打破する事が出来ないまま、長門同伴のもと町を練り歩き、気が付けば

「……此処は……」

図書館前まで来ていた。

此処はキヨンが長門フラグを立てる場所だった筈。違ったかな？

いや、合つてると思う。

長門を見てみると、まあ、変わらず無表情だが、そこに幾らかの好奇心を見出だした。……俺の勘違いかね？　まあ、いい。訊けば分かる事だし。

「ねえ、有希」

「……」

まだ一言も発してくれませんか、そうですか。

「図書館……行ってみない？」

「……」

首肯。

長門は少しの間を置いて、静かに、ほんの少しだけ顎を引いた。

「……じゃあ、行きましょ」

喋らない長門、冷や汗を流す俺。端から見てこれほどおかしなパティーは無いだろう。外見的には、どちらも美少女かもしれんが、ともかく。

俺と長門のゴールデンウィーク初日は、図書館で読書と相成った。

キヨン担当のフラグとかどうしよう。そんな事で頭を抱えながら、長門を連れ立って図書館へと足を踏み入れた。

「うわ……」

眼前には、うずたかく積み上げられた本、本、本。

それらは椅子に座る長門を取り囲むように配置されていて、長門の姿は正面からでないと確認出来ない。何だこれ、凄く迷惑じゃないか。

これは注意されるだろうと思っていたのだが、ふと周囲を見遣れば、皆さん呆気に取りられて固まってしまっている。そりゃそうだ。原作ではやけに分厚い本を読み耽っていただけじゃなかったか。まさかこんな暴挙に打って出るとは。

俺は館内を無然たる面持ちでぐるりと見遣り長門の注目度を確認すると、キヨンさながらに溜息を吐いた。

やれやれ、つてのは、こういう状況で使えば良いのだろうか。

当の長門と言えば、周囲の視線を七割方本がシャットアウトしているので黙々と本を読んでいる。まるで俗世に興味は無いと言わんばかりだ。まあ、どれほどしげしげと眺められようが、長門は微

動だにしないのだろうか。

さて、長門は読書に没頭している訳だが、俺は何をしよう。いや、図書館に来たのだから本を読めばいいのだが、この図書館、ざっと見ただけでもかなりの蔵書が犇めき合っている。この中から一冊、面白い本を見付けるのは至難ではないか？

「うーむ」

思わず唸る。

「あら、涼宮さん。こんな所で会うなんて奇遇ね」

と、棚を見詰めて頭を悩ませる俺に、後ろからお声が掛かった。

この声は……

「ああ、あちゃくらさん、こんにちは」

「うふふ、もうその呼び名は定着しちゃってる訳ね？」

「何れは全校に喧伝して回ろうかと思ってるわ」

「……止めて……」

俺に声を掛けてきたのは朝倉涼子　もとい、あちゃくらさんだった。弄り過ぎたのか声のトーンが一気に下がったが、これも愛ゆえに、と言う奴である。異論は認める。

ゴホンツ、と、あちゃくらさんが取り繕う様に咳込む。

「涼宮さんはどうして此处に？」

「……成り行き？」

「いや、訊かれても」

俺だっけどうして休日に図書館に来てるのか、イマイチ釈然としないのだ。

「そついうあちゃくらさんはどうして？」

「それに答えるまえに『あちゃくら』って呼び方、ホントに止めてくれないかしら」

「だが断るわ」

「泣きたい……」

とことんキャラ崩壊の道を辿る人だ。俺が要因なのかもしれないが……こんな人がキヨン殺害を本当に目論むのかと心底疑問に思う。

「またもゴホンツと仕切り直し、あちゃくらは俺の問いに答えてくれた。」

「私が此处に来たのは……」

「ちらつと長門の方に目をやるあちゃくらは。」

「あの本の壁の向こうに居る長門さんと来る約束をしていたからよ」「有希と?」

「ええ。長門さんったら私を待たずに出掛けちゃって、此处に来る道は知らない筈だから心配だったんだけど……要らない心配だったわね」

「そう言つと、あちゃくらはクスツと微笑んだ。」

「エピソードがやけに人間臭いんだが、本当なのだろうか。本当だったら、長門が俺に付いて回ったのは、図書館の場所が分からなかったから、という事になる。」

「単純に迷子だよな、それ。インターフェース殿が迷子になるのか、と些か疑問に思うが。」

「……でも、もしかすると、俺が長門の無表情に見た好奇心には、辿り着いた事による安堵があつたのかも……。」

「いや、

「それは無い、か」

「何が?」

「んーん、何でもないわ」

「手をヒラヒラと振って答える。」

「再度長門の方を見る。長門は未だに本を読んでいる様だった。…」

「まあ、周りに鎮座している本を見たら分かる事だが。…ふむ。」

「あちゃくらはさんが来た事だし、あたしは帰るわね」

「あら、一緒に本でも読んでいかない?」

「また何れ、って事で」

「先刻行った問題、どうやら答えは?の様だ。あちゃくらはさんを友人と呼ぶには付き合いが浅いし、助けに来てくれた訳でも無いけれ

ど。

取り敢えず、長門との間に漂う妙な空気に苛まれる事もこれでは無くなった訳だ。

「あちゃくらさん」

「何かしら？」

「また、学校で」

「……ええ」

あちゃくらさんは綺麗に笑った。うむ、谷口のA Aランクプラスって評価は非常に頷けるな。インターフェースなのが残念である。

俺はあちゃくらさんに別れを告げ図書館を後にした。

さてと、これからどうしよう。陽はまだ高い。もうちょっとそこらを徘徊してみようか。原作にあった駅前の喫茶店なんか良いかもしれない。キヨンが居れば奢らせてやりたいところだな。

そんな事を考えながら、俺は辺りをぶらついた。ポニーテールを揺らしながら。

余談だが、この後駅前にてキヨンと妹ちゃんに遭遇した。勿論奢って貰った訳だが、それは言うまでもないだろう。ハルヒの力つてのは実に恐ろしいモノだと、俺はパフェを貪りつつも思った。

七 ゴールデンウィーク二日目の事（前書き）

キヨンが言ってた『田舎のバーさん家』が登場。原作では特に語られて……ない、ですよ、ね？

ま、いいや

取り敢えず章題でお気付きの方もいらっしやると思いますが、しばらくゴールデンウィークが続きます。今回はまだ二日目。先は長い。

本編が碌に進みませんのでご了承下さい。石を投げないで！

七 ゴールデンウィーク二日目の事

「わーい、ハルにゃんと一緒ー！」

俺の隣で妹ちゃんめがっさはしゃいでいる。その更に隣では、キヨンが溜息を盛大に吐いていた。

今日はゴールデンウィーク二日目、今はその早朝である。

どうもキヨン達は今日これから田舎のバーさん家に行くそうだが、本当は昨日だったらしいが俺に出会って敢え無く断念したそう。妹ちゃんがやけにはしゃいでいたので切り出せなかったと見たね。因みにご両親は所用で行けないのだとか。

「ゴールデンウィークに従兄弟連中で集まるのが家の年中行事なんだよ」とはキヨンの言葉だ。健全な高校生がなんて寂しい、と言おうとしたが、自分の首を絞める事になるので自重しておいた。さて。

親類の家に向かうこの兄妹だが、その面子に俺も数えられる。つまり俺もキヨンと共に田舎のバーさんとやらに会いに行くのだが、そうなった経緯については昨日に遡る。

とは言っても別に何の事はなく、単に妹ちゃんが「ハルにゃんも連れてこー」だとか言い出して、そのままキヨンを押し切っただけの話なのだ。殆ど妹ちゃんの独断で、俺の意思に関係無く涼宮ハルヒの同行は決定した。

その独断決定を、キヨンは嫌な予感でもしたのか覆そうと躍起になったりしたが、やっぱり妹ちゃんに負けた。ヒエラルキーの頂点は妹ちゃんなのかもしれない。

予定も何も無いので嬉しかったのは秘密だ。

そんな昨日を経て、やって来た今日だ。

キヨンの事をキヨンと名付けた人も居るかもしれないと思うとワクワクするな。そう言えばキヨンの本名って何だっけ……まあいいか。うん。キヨンはキヨンだ。それ以外の何者でもないさ。

因みに、だが、今日は着いた先でお泊りなんだそうだ。部屋は大丈夫なのかとも思ったが、足りなかった場合、きつと相部屋でもするんだらうと思っておく事にした。

まあ、そんな感じで、俺達は朝っぱらに駅前で昨日に引き続いて合流を果たし、電車が来るのをただ待つのだった。

「電車来ないねー」

先程から俺の右手を独占している妹ちゃんが、やや不満げな表情でそう零した。

「うん、来ないねー」

「次だ、もう少し我慢な」

「ぶー」

キヨンの無情な宣告にブーたれる妹ちゃん……。

「かぁいいわー」

「はえ？」

おっと思わず口に出してしまっていた。妹ちゃんが疑問符を頭上に展開しながらこちらを見てくるが、何でもないと言い張りお茶を濁す形を取る。お持ち帰りモードは俺のキャラじゃない、よな？

この後も不満たらたらな妹ちゃんであったが、間もなくやって来た電車に乗るや、きゃっきゃと小学五年生と思えないはしゃぎっぷりを見せてくれた。キヨンはいつまでも幼い妹ちゃんを見て溜息を漏らしていたが、俺としては妹ちゃんはずっとこのままで居て欲しいね。だってかぁいいからさ。

古びた路線バスに揺られながら窓外を見遣ると、もうそこは普段見慣れたコンビニだとかは面影も無く、あるのは田畑や山々ばかりであった。うむ、田舎である。

キョンが言うにはバスを降りてから二時間は歩くそうで、面倒臭い、というのが正直なところだ。

「田舎ねえ」

「そう言つたら」

閑古鳥だつて居そうにないんだが。いや、それは言い過ぎ……でもないか、人居ねえ。

「俺達は一日遅れなんだ、少し急ぎ足で行くぞ」

そう言えばそうだった、昨日サラッとキョンに奢らせた為に（更に妹ちゃんによる俺の挟込みがあった為に）キョン達は他の従兄弟さんより遅れていたのだ。既に一日遅れたんだから急ぐ必要は無い気もするが、まあそこは様式と言うかそんなもんなんだろう。

ようやく見えた停留所でバスは止まり、気付けば船を漕いでいた妹ちゃんを引つ張って、俺達は所々舗装が剥がれている地面に降り立った。

此処から、後二時間。

山の中に引つ込み過ぎだろ、観光客を捕らえて食つてんのか。そう叫びたくなるくらい遠い。観光目当てで此処に来る人が居るのは、甚だ疑問だが。

「さて、と。……歩くぞ」

「……眠ーい」

「まあ、きりきり歩きましょう」

見た感じ、しばらくはひたすら一本道の様で。

俺は目をしょぼしょぼさせる妹ちゃんを見て和んだりしながら、お婆さんの家を目指すのだった。

「……………」

「……………」

「……………むにゃ」

三点リーダーを並べ、お互いに沈黙しているのが俺とキヨン。歩
きながらも寝ようとする猛者が妹ちゃん。

話題が無いッ！

長門と一緒に居る時みたいな感じなんだけど、ナニコレ、辛い。
きつと喋ればキヨンが返してくれると思うのだが、考えがそこに
行き着くと現れる問題がある。話題が無いんだよ。

「ハルヒ」

俺がいかにかに沈黙を打破しようかと頭を捻らせていると、キヨンの
方から声を掛けてきた。

「なに？」

「宇宙人とか未来人、異世界人に超能力者なんて……………居ると思うか
？」

それはまるで、キヨンが初めて声を掛けてきた時の様で。キヨンは
改めてこう言いたいのだろう、「あの自己紹介は本気か？」と。
俺はあの時返答はしたのだが、そういえばキヨンは聞いていなか
った様な気がする。

「居るわ」

だから俺は、はつきりと断言してやった。だって居るのだから。
宇宙人も未来人も超能力者も。異世界人……………は、ちよつと分からな
いが。

クラスメートにだって一名、宇宙からの刺客が居るんだぜ、と言
ってやりたいくらいだ。

「まだ全部見た事はないけど、いつかあたしの前に現れる。そう思
ってなきゃ、あんな自己紹介しないわよ」

「そうか」

「そうよ」

俺の返事からは、また沈黙が場を支配した。

妹ちゃんも足取りが覚束なくなってきたのでキヨンが背負い、俺はキヨンと妹ちゃんの着替えが入った鞆を、キヨンの代わりに持つ。その間も会話は無い。

そうして俺達は沈黙の妖精に支配された空間を伴って、前述通り二時間歩いた先にあつた目的地に辿り着いたのであつた。

「あらキヨンくん、遅かつたわねえ」

俺達を出迎えてくれたのはキヨンの伯母さんだそうで、この人が何を思ったのかキヨンをキヨンと名付けた張本人であるそうなの。

「はははっ、すみません。妹は寝ちゃってますし」

「あらあら」

ははははははっ、と笑い合う二人は何だか不気味だが気にしたら駄目な気がする。

「……あら？ そっちの可愛らしいお嬢ちゃんはどうしたかしら？ まさかキヨンくんの彼女？」

「ぶっ！」

キヨンが何かを吹き出して動揺している。分かり易い奴だ。

俺はキヨンの後ろから一步前へ進み出し、

「初めまして、私、キヨンのクラスメートの涼宮ハルヒと申します」

「まあ」

「彼女ではありませんが」

「まあ……」

「仲良くさせて頂いてます」

「まあ！」

「この度は親類の方達だけの集まりに部外者がやって来てしまい申し訳なく思」

「いいのよそんな事！ 気にしないで！ それよりも！ これからもキヨンさんと仲良くしてあげてね！」

「それは勿論」

伯母さんは満面の笑みを浮かべながらこちらの手を握り上下にぶんぶん振ってくる。どうしたんだ一体、と怪訝に思ってしまう程上機嫌だ。

それから伯母さんは上機嫌のまま、一先ず俺達を部屋へと案内してくれた。移動中に「実は部屋が人数分無くてねえ」とか言つたのが気に掛かったが。

着いた先は六畳程の部屋。まさかとは思うが、三人で此処を使えと？ 確認の為に伯母さんを見ると凄くいい笑顔で頷かれた。……

まあ、仕方ないか。元々俺が来る予定じゃなかったのだから。

キヨンが先程を上回る勢いで動揺してたのは見なかった事にしてやろう。俺って優しいなあ、優しい。

部屋に荷物を置き、寝てる妹ちゃんをそつと下ろしてから、布団敷いた方が良くね？ となり、もそもそと布団を敷き、その上に妹ちゃんを移動させたりして。

妹ちゃんはすやすやと寝ている。朝、集合の時間が早かったし、電車に乗った時はしゃいでたから疲れたんだろう。

「やっぱりかぁいいわぁ」

とてもキヨンの妹とは思えない愛らしい寝顔を見てそう漏らす。
「じゃあ、そろそろ行こうかしらね」

伯母さんがそう言うのと部屋から出ていく。っていうか居たのな、
伯母さん。

俺とキヨンは伯母さんの後を追ひ、並んで歩く。

「ねえキヨン、何処行くの？」

「広間だろう。そこで宴会でもしてそうだから」
成る程。

ゴールデンウィークに正月みたいな事をするのな、キヨン達は。
俺の家では前世でも涼宮家でもゴールデンウィークにこんな事はし
なかったが。はてさて。

そうこうしている内に、どうやら広間に着いた様だ。伯母さんが
扉を開ける。

先ず目に飛び込んできたのはテーブルの上の惨状。食い散らかし
で酷い有様だ。

次に、妹ちゃんよりも小さな子供達が数人、うだうだしている姿。
異様に切ない。

最後に、その親御さん方が昼間っからビール片手に赤ら顔でゲラ
ゲラ笑い合ってる姿。こちらは子供達とは違い宴もたけなわと言っ
たところか。

非常に入り難い空気が、そこには充満していた。

「ん？ おおキヨンくん！ やつと来たか！」

「遅れてすみません」

「んん？ キヨンくん、妹は？」

「疲れて寝てしましまして」

「しゃあないさね、遠かったろうからねえ」

わいわい、わいわい。

やっぱり、凄く入り難い。どうしよう。

実に和気藹々とした空気が流れている。キヨンが来た事によって

子供達も目覚めたから尚更だ。

「……で、キョンくん」

「あの娘は」

「彼女かい？」

親御さん方がぼつねんと佇んでいる俺を視線で射抜きながら、さつき聞いた覚えのある言葉を口にした。

またしても吹き出すキョン。やれやれな俺。彼女というワードに騒ぎ出す子供達。ゲラゲラ笑う大人。

暇を大いに潰せる代償として、酷く疲れそうだと思う、ハルヒさんなのでした。

「君……涼宮って言うのかい？ 涼宮さん、こっち来て一緒に飲まんかね？」

「飲もー！ ね、ハルヒちゃん、飲もー！」

「じゃあ、お言葉に甘えて、少しだけ」

そこから、俺の記憶は途切れている。

ハ ゴールデンウィーク三日目の事（前書き）

こついうのを難産と呼ぶのでしょうか……今回は執筆に相当時間が掛かりました。多分、逆子だったんだと思います。

何も今回に限って時間を食った訳ではありませんけどねッ！

もうちょっと短時間でそれなりの量を書ける様になりたい。それだけが私の望みですきつと。

ハ ゴールデンウィーク三日目の事

「んー……痛ッ」

俺は頭を感じた鋭い痛みで目が覚めた。

うつすらと瞼を開けた俺の視界に飛び込んできたのは、人間の顔みたいなシミのある天井だった。

此処はどうやら叔母さんに案内された部屋の様だ。俺は此処で布団を被って寝ていた。いつ布団に入ったのだろう。

のそのそと上体を起き上がらせる。

頭が痛い。

寝起きとしては限りなく最悪だ。過言ではない。痛みが頭の中でビート刻んでやがる。

何故こんな頭痛が蔓延っているのか。首を傾げたが、思い当たる節があった。

どう考えても酒宴に混ざったからだ。その時の記憶が大部分無いのだが、記憶がトブ程酒を飲んだという事じゃなからうか。

未成年の飲酒はダメ、ゼツタイ。とは言っても、未成年飲酒の結果として、今の俺が居る訳で。

説得力などカケラも無い。

布団の中に入った記憶が無いのに布団使用中なのも酒が関係しているのだろう。誰かが布団まで運んでくれたのか。

俺が痛みに顔をしかめつつも運んでくれた誰かに感謝していると、部屋の襖ががらりと音を立てて開き誰かが顔を覗かせた。

というかキヨンだった。

「……何だ、起きてたのか」

キヨンの気怠げな表情は今に始まった事ではないが、今日は何だか殊更気怠く見える。テンションの低い事低い事。朝っぱらから最高にハイになれとまでは言わないが、こうまで低いのもどうかと思う。

「随分疲れてるみたいじゃない」

「そう言うお前はどうかんだ」

「もう最悪。頭痛が酷いわ」

「飲み過ぎだ。だから止めとけって言っただけだよ」

「やれやれと呟くキヨンには悪いが、そんな事を言われた記憶は無い。思わず首を傾げる。」

「そんな俺の様子を見ると、キヨンは何処かほっとした面持ちとなった。どうしたんだ。気になる態度である。」

「また呼びに来るから、それまでに着替えてろよ」

「俺が疑問を口にする前に、そう言葉を残してキヨンは部屋を後にした。遠くから「ハルにゃん起きたー？」とか「彼女、大丈夫？」とか聞こえるから、皆さんに俺の目覚めを報告でもしに行ったのかもしれない。」

「そういえば、一体俺はどのくらい眠っていたのだろう。」

「部屋に備え付けられている時計の針は七時を示していた。夜の……ではないか、部屋の中は僅かに明るい。陽射しがカーテンを透過して、部屋を照らしているのだ。」

「朝の七時。」

「日付は、当然変わっている。」

「この家に着いたのが昼過ぎである事から、俺がどれほどの時間を睡眠に費やしたかが分かるだろう。いや、もはや睡眠と言うよりも昏睡じゃなからうか。怖え。」

「酒が俺から時間を奪った。取り敢えず、金輪際酒を飲まない事にしよう。原作ハルヒに倣ってノンアルコールとか定めるのもいいかもしれない。」

「ところで、俺の酒癖はどんなモノだったのだろう。原作の様に酒乱だった……とか？ まさか。そんな事ある訳……無い、よな？」

「しかし、キヨンに止められる程飲んだという話だったし、原作通りという線が非常に濃厚な気もする。……何だか頭痛が強くなったぞ、クソ。」

「……痛う」

そろそろ痛みにはご退場願いたいが、それは叶わぬ願いという奴だろう。しばらくはこの痛みと共存しなければならぬ。やれやれ。朝っぱらから溜息が漏れる。

ゴールドデンウィーク三日目の朝は、清々しさとは無縁だった。

どうやら俺を運んでくれたであろう誰かは、纏めていた髪を解いてくれていた様だ、有り難い。纏めたまま眠ってしまうと、後で梳くのが大変なのだ。

髪を纏めポニーテールになると、俺の着替えは完了する。

服装は、白色無地のロングTシャツに、クラッシュ加工されたシヨートデニム。俺はファッションに明るい訳ではないので適当に選んだのだが、まあいいだろう。そんなに変な恰好ではない、筈。そう思いたい。

キヨン曰くこれからの予定は特に無いらしく、各々が自由に過ごすとの事。だったら自宅に居ても同じじゃないかと思うなかれ、見知らぬ土地は散策するだけで楽しいものなのだ。少なくとも、俺の

場合は。

朝飯を平らげた後、そこらをぶらぶらしてこよう。俺がそんな算段を立てていると、キヨンが宣言通りやって来た。

「着替えたか？」

「ええ」

短く返事し、キヨンの先導で広間へと向かう。広間には既に昨日見掛けた子供達が食卓を囲んでいた。妹ちゃんも子供達に混ざっている。が、親御さんの姿は無い。どうやらダウンしている模様。俺達が昨日着いた頃には相当出来上がっていた事を鑑みるに、俺よりも症状が酷いのだろう。

子供達の他には、昨日出迎えてくれた叔母さんが居るくらいであった。……叔母さんが、こちらをやけにニヤニヤと見てくるのは何故なんだ。

「ウフツ、仲が良くていいわね」

締まりの無い表情である。

叔母さんの言葉のベクトルは、明確にこちら　キヨンと俺に向いていた。一緒に広間へやって来ただけなのだが。この人は俺とキヨンと一緒に行動する度に「仲が良いわね」と言っんじゃないだろうか。うーむ、言いそうだ、というか言うたる。

キヨンと仲が良いと思われるのは構わんのだが、そこから飛躍して彼女だと思われるのは勘弁願いたい。いや切実に。

「ハルにゃん！」

これから叔母さんへの対応をどうしようかと頭の中で軽く思案している、子供達との遊びを放棄して妹ちゃんがこちらにやって来た。今日も妹ちゃんはおかしい。

「妹ちゃん、おはよ」

「ハルにゃん、大丈夫？　気分悪くない？」

挨拶も放棄した妹ちゃんは、心底心配そうだった。酒を飲み過ぎた俺の体調を気遣っているのだろう、なんていい子だ、お持ち帰りしてしまいたい。鈍女になってしまいたい。

俺は妹ちゃんを安心させる様になるだけ柔らかな笑みを浮かべ、優しく応えた。

「大丈夫よ、心配要らないわ」

ホントは頭痛がパネエ訳だが。出来れば寝てたい。しかし妹ちゃんをこれ以上心配させる訳にはいかんだろう。

『心配させない』と心の中で思ったら、その時既に行動は終わっているんだッ！

「ホントに？」

「ホントよ」

この問答で妹ちゃんは安心したのか、可愛らしい笑顔を見せてくれた。これでキヨンと血が繋がってるのか。義妹じゃないだろうな。「貴女達、そうしてると本当の姉妹みたいねえ」

うふふ、と微笑む叔母さんは、そんな事を呟いていた。こんな妹なら大歓迎、こう思うのは、俺が前世も今も一人っ子だったからだろうかね。

因みに妹ちゃんの実兄は、手持ち無沙汰で立ち尽くしていた。何処か哀愁を感じる立ち姿である。

「はい、じゃあそろそろご飯にしましょうね」

叔母さんは茶碗にご飯の山をこしらえながらそう言う。度を越した山盛り具合に、キヨンから苦笑が漏れる。その白米山が構築された茶碗は、俺の前へと運ばれた。

普通、女子に山盛りの白飯を寄越すだろうか。いや、食べるけども。ハルヒの体ナメンなよって感じだけでも。

……後でキヨンから聞いた話だが、この叔母さんにとって、茶碗山盛りのご飯はもてならしい。お米食べるよッ！ と、まあそういう事なのだろう。そういう事にしておこう。

キヨンには多過ぎず少な過ぎずな量が盛られた茶碗が渡されていた。まさに普通盛りである。

俺達は渡されたそれと、食卓に並ぶ大皿に入ったおかず達を食べていった。

うむ。

沢庵が、美味い。

さて、自由時間がやって来た。各々、既に好き勝手行動している。大人は基本的に布団の中、子供達は何処ぞへと消え、叔母さんは買い物に行くのだと呟いて姿を眩ませた。

こんな田舎で何を買えるんだ、と失礼な事を口走りそうになったのは秘密である。

俺はと言えば

「不思議探索よッ」

「……すまん、何だつて？」

ハルヒつばい事を宣っていた。

「だから不思議探索よ、不思議探索」

キヨンは凄まじく顔をしかめる。理解に苦しんでいる様だ。しかし、俺は続ける。

「あたしはね、思うのよ。ただ普通に散歩する　それじゃダメだ
と」

「何がダメなのかさっぱりなんだが」

「もしッ、散歩中に、あたし達の近くにツチノコが現れたとしても、散歩をしているあたし達は気付けないわよね」

「先ず、ツチノコは現れないからな」

「もしもの話よ、黙って聞きなさい。散歩つてのは歩くのが目的な訳じゃない。でもね、あたし達が散歩ではなく、不思議を探すぞつて気概を持つてたなら、そのツチノコは発見出来ると思うのよ」

「あー……つまり？」

「どうせ暇なら、散歩しながら、けれども辺りに目を光らせて不思議を探しましょうって事よ」

キヨンは微妙な視線をこちらに送信しているが、俺はそいつを蹴散らす様にハルヒの恒星の如く輝く瞳をぎよろりとキヨンに向ける。眼力まで鋭いハルヒはホント凄えわな。大体の輩は一睨みだ。……さておき。

……そもそも、俺が不思議探索というワードを持ち出したのは、キヨンが暇だと漏らしたからである。

暇だったら不思議探索しようぜという、所謂お誘いを、俺はしていたのだ。俺としては別に不思議探索なんざする必要は無い、更々無い。

しかしまあ、暇だと嘆く友人の為に一つ提案してやった訳だ。『不思議探索よッ』とな。

散歩しながらのんびりと不思議を探す、それが俺の提案する暇潰しである。

原作ハルヒなら、バイタリテイ溢れる行動力で本格的にツチノコ狩りにでも赴いちまいそうなのこのプラン、果たしてキヨンには効果がいまひとつの様だった。

「お前つて、そういう……不思議なモノだとかが好きなのか？」

「まあ、好きよ。決まってるじゃない」

「……そうだな、じゃなけりや、あんな自己紹介しないよな」

アレは原作の通りにやったただけだが。いや噛んだけども。

「で、キヨン。どうするの？」

俺の誘いを受けるか否か。何も受ける事は無いのだが、キヨンなら溜息吐きながらでも一緒に来てくれそうだと思った。

「……どうせ暇だしな、不思議探索とやらを試してみるか」
キヨンはホント良い奴だと心の底から思った瞬間だった。

こうして俺達は初めての不思議探索を地元から遠く離れたこの田舎で行う事になった。不思議探索と言うものの、実態は散歩以外の何物でも無いという事は言うまでもない。

ツチノコくらいなら本当に出るんじゃないか。そんな事を頭の最奥で考えながら、俺とキヨンは緩慢に歩を進めていった。

ハ ゴールデンウィーク三日目の事（後書き）

はい、まさかの『次回へ続くッ！』のパターンでした。

べ、別に『取り敢えず投稿しよ』なんて考えたりは（ry

サーセン、その結果がこれでした。

九 不思議探索 或いはツチノコの事（前書き）

頑張った結果がコレでした。残念、ホント残念。私の冒険は此処で
(r y

九 不思議探索 或いはツチノコの事

男女が二人つきりで歩く、これは見様によつては所謂デートと捉えられ ないな、捉えられない。無理だ。主に俺が。

ゲロ以下の臭いがぶんぶんする事を考えながら、俺はキヨンと共になだらかな坂道を歩いていく。

のどかだ。

淒く平和である。

梢を揺らす風や木漏れ日が心地良い。

しかしながら、ツチノコは現れない。

「うーん」

ハルヒパワーを以てすればツチノコくらい登場させられるかな、という考えは、どうやら浅はかだった様だ。……誰だ、今「浅はかなり」とか呟いたのは。

「どうした？」

「ツチノコが出ない……」

「そう簡単に見付からないから未確認生物なんだろうよ」

尤もである。

「狭量な奴ね、全く。姿くらい見せなさいよ」

「無理言うな」

たわいのない話をしながら、俺達はひたすらに歩く。目的地なんてモノは無い。ツチノコは……まあ、出て来りゃ儲けモン、みたいな感じか。

既に宇宙人はがつつり登場済みなんだがなあ。

ツチノコ云々は、そもそも俺にハルヒパワーがある事前提の戯言な訳だが、俺も自分にハルヒパワーが本当に宿っているのかは分からない。

ツチノコが現れると、俺には超常変態パワーが備わっていると考えられるのだが。

バロメーターさながらな役割をツチノコに押し付けた。実に不憫だ。蛇如きに憐憫の情を垂れてやんのは癪な気もしないではないが。「ハルヒ」

隣のキョンが俺の名……でいいのか？ ま、とにかく俺を呼ぶ。そちらを見遣ると、そこには、信じられないモノを見たと言わんばかりに目を見開いているキョンが、横合いの草叢の方を凝視する姿が。

キョンは再度俺を呼ばわった。

「おい、ハルヒ」

どうしたと言った、キョン。意外な程の冷静さに定評がある皆のキョンくんは何処に行った。

まさかと思うが、件のツチノコさんを発見でもしたか？ いや、それこそまさか、だ。

僅かな動揺が未だに窺えるキョンに対し、俺が口を開こうとして

ガサツ。

不自然に草叢が揺れた。一瞬びくついた事は忘れたい、心底忘れない。

ガサツ、ガサツ。

またも、草叢が揺れる。先程よりも揺れが大きい。

ツチノコだったらどうしよう、と思う気持ちはあるが、猪とかだつたら更にどうしよう。現実的には後者の方がありそうで、普通に恐ろしい。

「……ちよつとキョン、見て来なさいよ」

「……丁重に断らせて貰おうか」

「男だつたら根性見せなさい」

「男女平等、行くならお前が行け」

なんて男らしくないキョンなんだ。

「いいから行きなさいよ」

行かないと死刑だからな。

「……はあ。仕方ない。……見て来てやるよ」

俺の心中での死刑宣告が届いたのか、観念した様に嘆息し、ゆるゆると頭を振るキヨン。押しに弱いな、おい。

そうして、未だにガサガサツと留まる事を知らない怪しげな草叢に、キヨンが先程までの歩調よりもややゆっくりと向かう。と。

「うおわッ!？」

草影から何かが弾ける様に飛び出した!

キヨンは自分目掛けて空を舞ったそいつを咄嗟に躲す。

道端にぼてりと落下したそれは、胴体の中央が膨れた、ツチノコっぽい奴。猪等では断じてない、ツチノコっぽい奴。

……ツチノコ? ツチノコなの?

その辺の蛇の様にも見える……んだが。俺は蛇談義が出来る程蛇関連の知識を蓄えている訳ではないので何とも言えない……うーむ。

「ハルヒッ!」

呻吟していると、キヨンが俺を呼び上げた。

何事かと思っていると、暫定ツチノコが尺取虫さながらの動きで素早くこちらに向かって来ていた。えっ、ちょ、速っ。

ツチノコはそのまま全身をバネの様に使い、跳躍。

「ひいッ!？」

間一髪でそれを回避。蛇が跳ぶとか、アリなの? 馬鹿なの?

「チー」

もはやツチノコとしか思えないそいつは、奇妙な鳴き声を以て『私、実はツチノコなんです』とアピールを行った。いや、半分くらい俺の捏造だが、噂じゃツチノコってのは『チー』って鳴くそうで、そんでもって跳躍力が凄いらしくて。更に動きが素早いらしくて。

……もう、ツチノコだよな、こいつ。

ツチノコ野郎は俺を標的にしてるみたいで、もう一度こちらに跳ぼうとしていた。

「ハルヒ、大丈夫かッ」

キヨンくん助けて。この子恐い。

というか、ツチノコ気持ち悪い。俺、爬虫類って苦手なんだよね……前々から。

ツチノコとか言い出さなきゃ良かったと、今更ながら後悔。

恐らくはハルヒパウワアによって出現したこいつは、俺がいかに後悔しようとも消えてくれない。後悔先に立たずとはまさにこの事である。

「チー」

一鳴きし、直後、跳躍。

素晴らしい跳びっぷり。……ヤバイ、避けれない、かも。

「ハルヒッ！」

ツチノコが跳んだ途端、キヨンが俺に突っ込んできた。そのまま、纏れ合いながら二人して倒れ伏す。

「……痛いわね、何すんのよ」

「……お前が、避けようと、しないからだろうが」

だって、一回目はまぐれ避けだもの。二回目となると難しいよ。あいつ速いし。

まあでも、所詮蛇だろ？ 噛まれたって大した事にはならないと思うが。……ツチノコが毒を持ってなければ、だが。

しかし、今はそれよりも。

「……ねえ」

「何だよ」

「いつまで乗ってる気？」

キヨンと俺はまだ地面に転がっていて、俺はキヨンにマウントポジションを取られた感じになっている。

アレだ、年頃の男女がこういう、抱き合う形になるのは、何と云うかその……如何なモノか。恋人同士ならまだしも、俺達はそういう関係じゃない訳で。って違う違う、これは、キヨンが俺を助けてくれた、その結果なんだ。キヨンの手が俺の体に触れていようと、不可抗力という奴でだな……ええい、落ち着け俺よッ！

俺の体はハルヒのモノだが、心はいつまでも男のつもりだ。だか

ら男と密着して落ち着き無くすなんて事は無い、絶対無い。有り得ない。

「わ、悪い……」

パツと離れるキヨン。

「チー」

そしてやって来た鳴き声。このタイミングでかよ。つーかそろそろ失せろよ、しつけーよ。

俺の思いは未確認爬虫類には届かないのか、尺取移動（命名、俺）で俊敏にこちらへと近づくツチノコ。俺まだ倒れたまんまなんですけど。

「ちよ、キヨン！ そいつどつかやってよ！」

可及的速やかに立ち上がりながら、キヨンに指示を飛ばす。キヨンは言われなくてもそのつもりだったのか、軽く足を後ろに引き、そのまま蹴り飛ばした。何も蹴らなくても。

「チギヤツ」

何とも形容し難い声を上げて、ツチノコは彼方へとすっ飛んでいった。すまない、ツチノコよ。俺が『出る』と思ったばかりに、痛い思いをさせてしまつて。

ほんの少し地面を転がったツチノコは動かなくなった。……あれ？

「し、死んだ……？」

嘘だろ、死んじやつた感じ？

「……いや」とキヨン。

「動いてるみたいだぞ」

キヨンの言葉にツチノコをよく見ると、確かに微かだが動いている。その事を俺が確認した途端、ツチノコは逃げる様に何処ぞへと去っていった。

どうやら、ツチノコとのエンカウントバトルは終了した様だった。

「……………」

残ったのは、猛烈な疲労感と、どろどろになった服。……頭痛が振り返してきやがった。

それから。

俺達は早々に散歩を切り上げ、帰路に着いていた。俺の頭痛の所為もあるが、お互いツチノコ騒動で疲れ切っていたからでもある。体力的にじゃなく、精神的に疲れた。

今日の教訓は、ハルヒパワー恐るべし、といったところか。アレが真実ツチノコなのかは分らないが、ツチノコの話をしていたところに、それっぽいのが現れたのは事実な訳で。

取り敢えず、ツチノコの再登場は絶対に願わないね。絶対に。

「……痛い」

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないから痛いだよ」

「いや、そりゃそうだが……」

ツチノコは去ってくれたが、頭痛は去ってくれそうになかった。

頭痛と言えば、俺は記憶の無い空白の時間に、一体何をしていたのだろう。折角だ、キヨンに訊いてみるか。

「ねえキヨン」

「ん？」

「あたし、酒を飲んでから何してた？」

返事は無かった。

オマケ・ハルヒさんの酒乱（音声だけでお楽しみ下さい）

「キヨン……」

「な、何だ？ 顔近いぞハルヒ」

「あの、あのね、キヨン……あたし……キヨンの事が……」

キヤーハルヒチャンカワイーキョクンガンバッテリーヒューヒュ

ー（ヤジ）

「キヨンの事が……」

「う、おお……？」

オイコラキョニーカオアカラメンナー（ヤジ）

「……」

「……ハルヒ？」

「ふ、ふふ……掛かったなバカめッ！」

バキッ（打撃音）

「ぐえッ」

「あーはっはっはー！ キヨン！ このあたしに勝とうだなんて百年、いいえ、一億光年早いわッ」

ハルヒチャーンソレキヨリダカラー（指摘）

「これでも喰らいなさいッ」

キヤーハルヒチャンダイターン（ヤジ）

「ばっ、何で抱き着いて……アッー！」

……キヨンの記憶はここで途絶えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931m/>

涼宮ハルヒの道程

2011年5月5日15時55分発行